平和への祈りを込めて 未来へ語り継ぐ

秋元　政由（あきもと　まさよし）さん

昭和12年生まれ。85歳。島名在住。
９歳で終戦を迎える。
市戦没者遺族会会長。県遺族連合会常務理事。遺族会活動などの援護事業への功績により令和３年度厚生労働大臣表彰を受賞。

――遺族会の会長を務められていますが、どなたを亡くされたのですか。

父です。父は満州東安省の本部輸送隊に所属していたので、母は、私と妹2人を連れて、父のいる満州に渡りました。

そこで私は、日本人学校に入学し家族皆で生活していました。冬の寒さが厳しく、学校から帰ると母が桶にお湯を入れてくれ、手を温めたことを覚えています。

昭和19年の春、父は沖縄の戦地に行くことになりました。翌年5月、父は33歳の若さで戦死しました。

――日本には、いつ戻られましたか。

戦況が厳しくなった昭和19年に母は日本に帰ることを決意しました。父が満州を去った後に生まれた妹は、その時、生後50日くらいでした。

強い母の姿が忘れられない

――引き上げ船の様子など覚えていますか。

横になって寝られないくらい満杯でした。道中で亡くなる幼子もいました。母は必死で、乳飲み子の妹と私たち兄弟を守ってくれたのでしょう。釜山を出港し、下関からは汽車に乗り、母の実家がある高萩を目指しました。夜行しかなく、1週間かかってやっと着きました。

――取り組まれている活動についてお聞かせください。

毎月15日に慰霊碑参拝を行っています。今年は3年ぶりに市戦没者追悼式が参列者を限定して行われます。また、県戦没者追悼式では、追悼の辞を述べさせていただきます。今後もできる限り、戦争体験を語り継いでいきたいと思っています。

毎月15日に慰霊碑参拝を行っている

――戦時中はどこで暮らしていたのですか。

ここ安良川です。空襲警報があると、家の中庭にある防空壕に逃げました。雨水がたまり、じめじめして居心地は良くありません。

――艦砲射撃についてお聞かせください。

昭和20年7月17日の深夜、アメリカ軍戦艦から艦砲射撃を受けました。小雨が降りとても蒸し暑い夜でした。母に「空襲があるかもしれないから、すぐ避難できるように服を着て、長靴をそろえておきなさい」と言われたのですが、言うことを聞かずに兄と裸で寝てしまったのです。

突然、警報もなく「ドドーン、ピカッ、ドドーン」鼓膜が裂けそうな音で雷のようでした。母は3歳の弟を抱え、私と兄姉も急いで防空壕に飛び込みました。

安良川にあった軍需工場を狙ったと思うのですが、石滝の旧高萩工業高校北側の土手に着弾しました。その後、音が次第に小さくなり遠ざかるまで、手を合わせて祈るばかりでした。

――高萩の市街地が焼け野原になったというのは本当ですか。

焼夷弾による攻撃です。B29爆撃機から火花が枝垂れ柳のようにパラパラと落下してきました。高萩小学校から市街地を見下ろすと、駅前通りの商店が立ち並ぶ町の中心部が黒ずんだ煙に覆われ、焼け野原になっていました。

綺麗な花を咲かせる教育を

――戦争のない世にするためにはどうしたらよいと思いますか。

戦時中の教育により、日本は勝つと信じ、戦況を逆転させる神風はいつ吹くのかと思っていました。

子どもの良い面をいち早く発見し、その子どもが天から降る雨が染み渡るような指導を施すこと。将来、一人一人の子どもが、自分色の綺麗な花を咲かせられるような教育こそが大事なのだと思います。

佐藤　四郎（さとう　しろう）さん

昭和８年生まれ。89歳。安良川在住。
12歳で終戦を迎える。
元公立学校校長。公教育への献身的な活動により地域教育への貢献がたたえられ、令和３年高齢者叙勲（瑞宝双光章）を受賞。

少年時代の回想を交えて記録集をまとめている

高萩市が受けた戦災　1945年（昭和20年）

【艦砲射撃】
7月17日午後11時ごろ、高萩沖の軍艦から石滝地区が砲弾を受けた。

【焼夷弾攻撃】
7月19日午後10時30分ごろ、米軍機が島名に焼夷弾を投下した。10数戸の家が燃えてなくなった。
同日午後11時ごろ、再び高萩の上空へ米軍機が戻ってきた。春日町、本町、大和町の一部に焼夷弾を投下した。町のほとんどが焼け、2人が亡くなった。

参考資料「高萩市史」